野望
ー 文禄・慶長の役 ー

飄々

広報委員

石田　健

賤ヶ岳の戦いに勝利した秀吉は、大坂城を築城した。長曾我部を下し四国を平定し、朝廷より豊臣姓を賜り、太政大臣に就いた（1585年）。島津を家臣に加え、小田原の北条氏を滅ぼした。さらに奥羽の伊達政宗を制圧し、天下を統一した。遂に家康を関八州に封じ込め、江戸に国替えさせた（1590年）。こうして秀吉は豊臣家の安泰を得た。

しかし、秀吉に従って戦った家臣団は、賤ヶ岳七本槍で勇名を馳せた加藤清正、福島正紀などを始めとした戦闘集団である。天下統一後、国内に敵はなく、これ以上の領地拡大はありえない。家臣軍団の忠誠心を保つため、彼等に与える報奨金や領地の要求を満たすため、また自身の三国一の王になるという願望を叶えたいとの思いが頭をもたげてきた。衰退した明国、インドのゴアのポルトガル政庁、フィリピンのスペイン政庁や台湾等に朝貢を求めた。朝鮮に対しては服属し、明国に攻め入る為の先導役を務めよと命じた。この時、秀吉が師として仰ぐ利休は、秀吉を諫め、朝鮮出兵に反対した。秀吉は利休を尊敬していたが、時には秀吉を諫めるために敵意を持っていた。激怒した秀吉は利休に切腹を命じた。秀吉のこの言動に対する論評は今も分かれるところである。朝鮮が求めを拒否すると、秀吉は加藤清正を先鋒に15万人もの大軍を釜山から上陸させ、朝鮮半島の侵略を開始した。初戦は明の援軍を破るなどしたが、水軍は朝鮮提督李舜臣に大敗し、補給路を完全に断たれ、休戦した（文禄の役）。

4年後、秀吉は明の使者の書に激怒し、再び朝鮮南部の占領を企てた。しかし厭戦気分の強い秀吉軍は、秀吉の死をきっかけに翌年朝鮮から引き揚げた（慶長の役）。

秀吉はなぜ利休に切腹を命じたのか？さらに無謀な世界規模の侵略戦争を考え実行したのか？

元々秀吉は若いころから征服欲が強かったと思われる。

老いと共に誇大妄想に発展したのか？それとも認知が進行して判断がおかしくなり、自分の気持ちのコントロールができなくなったのか？

英雄が権力を握ったまま老いると、このような結末になるのか？

名護屋城跡を訪ねた時、天守への道の石垣が激しく風化していた。

時を経て　野望風化す　太閤忌